

# 病児保育奮闘記

(2)

子どもサポート H&K

大石 仁美

## 準備段階は楽しい！

2002年3月、パートナーの小川が社会福祉士国家試験に合格。勤めていた保育園を退職し、さらに巾を広げようと新たな勉強をはじめました。社会福祉士会の研修とそこでのボランティア以外に、パソコン教室、音楽療法、わらべうた、このわらべうたは、遠野まで出かけるほどの熱の入れようでした。新しい何かがそこから生まれてくるかもしれないという漠然とした期待と不安が入り混じって、だからこそ何かに夢中になっていた、そんな心境だったと思います。私は私で、彼に刺激を受けながら、これから始めようとする仕事の青写真を描いていました。何処にどのような施設をつくるのか、必要なものは何か、費用はいくらかかるのか、保育の中身はどうするのか、子育て中の親が本当に欲しい支援は何なのか、立場を変えて自分だったら何をして欲しいだろうか、そういうことを考えながら、理念を明文化し、ターゲットをしぼり込み、

少しずつノートに整理していきました。必要だと思う物品も、思いつくままその時々

にノートに書きとめ、未来の仕事現場を思い浮かべながら、空想にふける時間はそれなりに楽しく、瞬く間に時が流れていきました。

理念は根幹ですから、だれが見ても分かるように、また時とともにぶれないように文章化しておかないといけないので、考えた末に「親と子どもの両サイドから、必要なとき必要なケアを」と簡潔にまとめました。この必要な時というのは今助けてほしいという切迫したものを含めており、予約制では対応できません。必要なケアは保育と看護、さらに心細く不安な子どもの心に寄り添う心のケアを含めています。私たちは自信をもって専門性をアピールすることに決めました。

さて、このように考えを整理すると、おのずと形が見えてきました。

① 予約制はとらない。かといって誰でも受入れることは不可能。

→会員制にして趣旨を理解してくれる人にしぼる。会員はいつでも利用できることを保証する。(利用者の定員を決めるのではなく、その日の子どもの状態や人数によって、保育者の方の数を調整する。)

② 保育園からの急なお迎え依頼に、親はすぐには動けない。

→親に代わってお迎えに行き、親が仕事を終えるまで、病児保育室でケアする。

いつでも利用できるということは、行政がやっている病後児保育ではありません。病中保育であり、医師の診察なしでも受け入れるということです。リスクがあるといえ、そうですが、親が一番困っていることに手を貸そうとすると、結果としてそうなるのです。よく観察し、状況を見極め、すぐに診察に応じてくれる医師が近くにいてくれれば大丈夫と判断しました。そうして、この二つを売りにして、パンフレットの作成を進めて行きました。

一番悩んだのは、料金をいくらにするかでした。行政の補助を受けているところは、一日利用しても2千円です。2千円では人件費どころか、光熱水費や消耗品等の維持費もあぶないでしょう。同じにするわけにはいきません。でも、出来るだけ安くしたい。3千円? いや5千円? 悩んだ末、団先生とグループのメンバーに意見を聞くことにしました。「まず、きちんと会費をとったらい。これは保険だから。万一に備えて保険料を払う。でも一度も使わずに済んだ。これが一番いいんじゃないか。」さらに「いく

ら良いことをしても、すぐ潰れてしまっはなんにもならない。」

この言葉でスーと霧が晴れました。相談してよかった!!

結局、年会費3万円、利用料は保育士さんの時間給と同じ一時間千円に落ち着きました。もっと高くても良いのではという意見もあったのですが、やっぱり、自分が利用者なら、これが限度かと思えたのです。ほんとにこれで良いのかどうか、不安もありましたが、ともあれこれで二歩も三歩も前進できたのです。この時がなければ今がないかもしれません。

さて中身が決まると、どんなデザインにしてどこに発注するかですが、「そのうち、こんなことをやるぞ」と当初から言いまわっていたので、すぐに「応援しますー」という人が現れました。私より20歳近く年下のピチピチギャルのような女性教師で、あまりにド派手な雰囲気、ショッキングピンクちゃんと半ばからかったりしていたのですが、(からかうのは、私のわるいくせです。)生徒の心情にもっとも近いところにいる人で、生徒の行動で解らないことがあると、彼女に聞くことで、生徒を理解する上でずい分助けられました。性教育の学習仲間として、一緒に事務局をして以来、姉のように慕ってくれていて、アナログ人間の私の行く末を心配してくれていたようで、ロゴマークの考案から、ホームページの開設まで、私たちの出来ないことを隈なく整え支援してくれました。宣伝のチラシも「まかせてよ!」と作ってくれ、パンフづくりは知人の業者を紹介してくれました。あとは私たちがどう動くかだけでした。本当にうれしいことでした。

2002年12月、私たちは全国病児保育協議会の研修会にはじめて参加しました。本当に不思議な偶然ですが、たまたま小川が、教え子で開業している小児科医に電話をしたところ、「うちも明日から病児保育をやるんですよ」というのです。なんとタイムリーなことでしょう。小川はアポをとって数日後に訪ね、資料をたくさんもらってきました。そのとき、全国病児保育協議会というのがあって、近々研修会もあるよと教えてくれたのです。私たちは、ただ今開設準備中の施設ですということで、入会手続きをすませ、開設の前に研修をうけるという幸運を手にしたのです。

研修会に参加して一番よかったのは、病児を扱う時の観察のポイントと、感染対策を整理出来たことでした。全国の仲間とつながるといふ体験は、とても新鮮で高揚感でいっぱいでした。

2003年1月。年明けを待ちかねるように、古家の改築工事が始まりました。何度も図面を書き直し、専門家に手直しをしてもらったものの、思ったような形になっていくのか、不安と期待で毎日現場を覗かずにはいられませんでした。仕事を終えてから覗きに行くので、たいてい大工さんは帰ったあとでしたが、今日は何処をしてくれたのだろうかと探すのも楽しみで、だんだん変わっていく不思議さに見とれていたものです。

この大工さんも実は、同窓生の息子さんで、以前「息子が宮大工になった」と聞いていたのを思い出し、連絡したところ、あっさりと親方が下見にみえて、その息子を責任者にしてくれました。そんなわけで、こち

らの要求も出しやすく、また親身になって対応してくれるので、当初の不安は吹き飛び、期待以上のものになりました。本当に有難かったです。

家の改築と同時進行で、やることは山ほどありました。書類ケースやコピー用紙、クリアホルダー等々、事務用品のほとんどは勤務先の事務所で発注してくれ、カルテの記録用紙等の印刷も、学校の印刷機を借りて放課後印刷させてもらいました。こんなふうにご気持ちよく応援してくれた事務員さんにも感謝でいっぱいです。

パートナーの方は、コネで、弁護士や小児科医の先生方と連絡を取り、これから始めようとする仕事への応援依頼の挨拶に伺ったり（皆、彼の教え子です）、実習でお世話になった保育園の先生方や、役所等へ、情報収集に駆け回ってくれました。一人ではとても出来ないことでした。私たちは性格もやることも正反対で、道を歩くのも彼は右側を、私は左側を歩くのが自然で、ハンガーのかけ方も彼は向こう側から、私は手前側から、彼は朝型、私は夜型、趣味も彼は音楽一辺倒で、美術には殆ど関心なし、私はこの反対です。生活の中でささいなことほとんどが、笑ってしまうほど反対の二人が、なにかを一緒にやろうとした時、こんなにうまく歯車がかみ合うなんて、どうしたということでしょうか。“半人前と半人前同士だから”二人合わせて一人前！二人同時に同じことをつぶやいて笑ってしまいました。不思議なほど充実感に満たされていました。

ところがここに来て、困ったことがおきました。お金が足りなくなったのです。

気が付くと、当初の予算をはるかに超えていました。もともとお金がなくてもケセラセラの二人ですが、この計画にはゆとりを持って予算を組んでいたつもりでした。

一つは、あてにしていた退職金が経営の悪化で二割カット。所持していたわずかな不動産も急激な土地の価格低下で、同じく二割の目減り。ただ、土地はどこも値下がりしていたので同じことなのですが、かなりのお金を投じて改築していたのに、届けていなかったために元の古い家の値段でしか売れないというのは、大きな誤算でした。これがかかり当てが外れたというか、ショックで途方に暮れてしまいました。必要な設備を削るわけにはいきません。二人とも居住マンションを買ったばかりで、貯金はわずか。その少ししか残っていない貯蓄をこの穴埋めに使うしかありませんでした。でもさらにあと少し電化製品を買うお金が足りない!! どうしょう・・・

「どうしょう・・・」小川のこのつぶやきを聞いた保育専門学校の恩師が、すぐに手をさしのべてくれました。

「楽しみに待っていますよ」そう言って、無期限、無利子でお金を出してくれたのです。

なんと有難かったことでしょう。